

大学生のライフストーリーにみるキャリア決定プロセス

川 端 亜紀子*・河 崎 智 恵

奈良教育大学生生活科学教育講座

(平成20年5月7日受理)

Career Decision Processes Observed from Life Stories of University Students

Akiko KAWABATA* and Tomoe KAWASAKI

(Nara University of Education)

(Received May 7, 2008)

Abstract

In this study, career decision processes were analyzed using a qualitative approach of the grounded theory (Glasser&Strauss 1967) for 20 university students aged between 20 and 23 years old (9 male students and 11 female students). As a result eight types of students were identified regarding their future occupations; 1) Decision made at the compulsory education stage with provisional decision making experience, 2) Decision made at the high school education stage with provisional decision making experience, 3) Decision made at the university education stage with provisional decision making experience, 4) Undecided with provisional decision making experience, 5) Decision made at the compulsory education stage without provisional decision making experience, 6) Decision made at the high school education stage without provisional decision making experience, 7) Decision made at the university education stage without provisional decision making experience, 8) Undecided with no provisional decision making experience. The differences regarding positivity toward choosing future careers, attitude and willingness towards working life were shown between those who have provisional decision making experience and those who have not. Especially those who have provisional decision making experience at the compulsory education stage showed clear willingness and expectation for working life, as well as a higher degree of involvement in seeking work, demonstrating the importance of supporting students in experiencing provisional career decisions at schools and career guidance at an earlier stage which calls for the development of useful programs and teaching materials.

Key Words : university student , career , decision making

キーワード : 大学生、キャリア、意思決定

1. 目的・方法

近年、フリーターやニートの増加や、働くこと自体に意味を見出せず、転職を繰り返してしまう若者、また、職業生活のみならず、結婚、出産などに対しても「意味」を見出すことができない若者の増加等、多くの問題が論議されている。このような状況をふまえると、若者達の「働くこと」に対する意識の変化は何によって左右され、何によって確立されていくのかを明らかにし、現代の若者が「働くこと」に意味を見出せないことへのプロセスを検証することが必要である。そこで、本研究では、就業前である大学生を対象とし、ライフストーリーの語りより、職業や将来に対する意識やキャリア決定プロセスを検討する。なお、本研究では、河崎(2000)の定義に基づき、キャリアを「生涯にわたる役割に関連した実践の道筋・進路」ととらえる¹⁾。

調査は、質的研究法(グラウンデッド・セオリー)を用いて、キャリア決定プロセスを分析した^{2) 3)}。調査対象者は20歳から23歳の男女20名(男子9名、女子11名)である。表1は調査対象者のプロフィールを示している。

表1 調査対象者

学部	希望職種	教育職(教員)					教育職(塾)	企業	進学	未定	計	
		幼稚園	小学校	中学校	高校	大学						
教育	数学	男			1		(1)			1	2 (3)	
		女		1	1						2	
	理科	男		2							2	
		女		2							2	
	家庭	男		2				1			3	
		女		1		(1)			1		2 (3)	
	技術(工業)	男				1					1	
		女								2	2	
	生活	男									1	
		女	1								1	
体育	男								1	1		
	女											
文学	英語	男					1				1	
		女										
家政	栄養	男										
		女								1	1	
計			1	8	2	1 (2)	(1)	1	1	2	4	20 (2)

* ()は大学院進学者の大学院卒業後の希望職種を示している。

面接時間は一人約1時間程度であった。

調査の流れは以下のとおりである。

① データ採取とデータ作成

まず、面接法によるデータ採取を行った。面接中は可能な限りでメモを取ると共にMDによる録音記録を行った。録音をしたMDをもとに、発話記録を中心とした網羅的記述によるフィールドノーツを作成した。

② データの分析 —コード化と理論構築—

この段階では、①で作成したフィールドノーツに記録された発言について一文一文コード化を行い、中心的カテゴリー(コアカテゴリー)を検出した。

③ 中心的カテゴリーを元にしたモデルの構築と検証、結論

中心的カテゴリーを元に、調査対象者をグループごとに分類し、モデルを構築した。

さらに、そのモデルを基にし、青年期のキャリア発達の特徴や傾向について検証を進め、結論を導き出した。なお、研究の信頼性をより向上させるため、データ採取時には先入観を持たないように留意し、フィールドノーツ作成においては調査対象者の発言をそのまま生かすために網羅的記述を行った。コード化、中心的カテゴリー制作においては主観的解釈に陥らないよう複数で行った。さらに、①, ②, ③の過程は繰り返し、螺旋的に行うというプロセスを重視した。

2. 結果と考察

2.1. キャリア決定プロセスの型

大学生のライフストーリーの内容を分析した結果、キャリア決定プロセスは、希望職業決定の時期により、大きく4つの型に分類できた。

「義務教育段階決定型」とは、小・中学校時に将来の職業について希望職種を決定し、その希望を最終的な決定まで持ち続けた者のグループである。このグループに所属する者は、希望職種に見合った高校、大学に進学をし、その職業に関わるボランティア活動やアルバイトも積極的にこなしている。4つのグループの中で、最もその職業に対する思い入れや憧れが強い。挫折や葛藤の経験が他の3つの型に比べて少ないことも特徴的である。

「高校段階決定型」とは高校卒業時まで希望職種を決定したものである。このグループはさらに受験以前決定者と受験時決定者とに分けることができる。受験以前決定者は、得意科目の影響や、突発的な出来事によって希望職種を決定した者である。受験期において、受験以前の希望にそった大学選択ができた場合は、その希望職種が最終決定まで持ち越されることとなる。受験時決定者は、そのほぼすべての場合が、大学進学をする際に入る大学や学部、学科の偏差値レベルと自分の学力、条件、興味を総合的に判断し、ある種折り合いをつける形で決定したものである。

「大学段階決定型」とは、大学時代において希望職種を決定したものである。このグループに属する者は全員が小・中学校、もしくは高校時代においても幾度かの希望職種決定経験を持っている。大学時代において、新たに何かに興味を持ち、希望職種を変更する場合や、さまざまな要因によって、小学校教師から中学校教師への変更といった、同職種間での変更を行っていた。

「未決定型」とは、現時点での希望職種が明確には決まっていない者である。このグループに属する者は、希望

職種が多様化しすぎたことによって絞込みが出来ていない者と、希望職種の決定自体を放棄した者に分類できる。

の影響を受けたものを代表とする外発的動機付けと、自己の興味関心などを代表とする内発的動機付けに分類できた(表2)。学校段階によって希望理由の内わけをまとめると図1～図4のようになる。

2. 2. 希望職種決定への動機

調査対象者の希望職業に対する理由は、他者などから

表2 職業の希望時期・希望理由

希望時期	希望理由		具体的理由	人数		
小学校	外発的動機付け	人的理由	職業人への憧れ	・担任の先生がいい先生だった。 ・電車を運転できるのがかっこいいと思った。	7	
			親の勧め	・親がお金が儲かる仕事だといったから。 ・親に家業をついでほしいといわれたから。		
			親の仕事への憧れ	・お父さんが楽しそうに働いていたから。		
			友人への同調	・友達になりたいがっていたからとりあえず言ってみた。		
		メディアからの影響	テレビドラマによる憧れ	・「あぶない刑事」を見ていてかっこいいと思った。	1	
	内発的動機付け	興味・関心	好きな勉強・教科との関連	・英語の勉強が好きだった。	5	
			趣味とのかかわり	・小説を読むのが好きで、自分も書きたいと思った。 ・サッカーが好きだったから。		
			好きなもの(動物など)とのかかわり	・動物が好きだったから。		
			学校という場自体への憧れ	・学校が好きだったから。		
		経験	習い事との関連	・ピアノを習っていたから。 ・スポーツ少年団でサッカーをしていたから。	4	
友達との遊びの中での興味付け			・いつも友達と野球をして遊んでいたから。			
自己効力・肯定感	得意なこととの関連 学校成績が良いことによる希望	・走るのが速かったから。 ・学校の成績がよかったから。	3			
中学校	外発的動機付け	人的理由	親の仕事への憧れ	・親の仕事が楽しそうだったから。	6	
			職業人への憧れ	・担任の先生がいい先生だった。 ・顧問の先生がいい先生だった。		
			友人への同調	・友達になりたいと言っていたから真似をした。		
		メディアからの影響	テレビドラマによる動機付け ニュース、天気予報への憧れ	・ドラマの中の教師にこがれた。 ・ニュース番組にでている人がかっこいいと思った。	2	
	内発的動機付け	経験	部活による動機付け	・部活がサッカー部だったから。 ・部活で陸上をしていたから。 ・部活をしているときにスポーツトレーナーが必要な仕事だと思ったから。	6	
			近所にあるお店への憧れ	・近所にとてもかわいい雑貨屋があって、そういうお店をしたいと思ったから。		
			職業調べによる興味付け	・授業で職業調べをした事がきっかけで興味を持った。		
		興味・関心	好きな勉強・教科との関連	・数学がおもしろいと思った。 ・理科が楽しかった。	2	
			反発	教師への反発による希望	・自分のほうが担任の先生よりうまく生徒とかかわれると思った。	2
			自己効力・肯定感	得意教科との関連	・自分が数学が出来るということに気が付いた。	2
高校	外発的動機付け	人的理由	他人の趣味への興味	・祖母が好き健康食品に興味を持ったから。	6	
			友人の影響	・理系に進んだ子はみんな薬剤師と聞いていたから。 ・友達と話しているときに薬剤師がいいと聞いたから。		
			親の勧め	・親が家をついで欲しいそうにしていたから。		
			親の職業への同化	・親が教師だから。		
			職業人への憧れ	・受験のときに親身になってくれた先生を見ていいなと思った。		
		流行	注目されていた学問への興味	・そのときに心理学が注目されていたから。 ・薬剤師が注目されているときだったから。	2	
	メディアからの影響	野球中継への興味と憧れ	・野球中継にはまって、インタビューをしてみたいと思ったから。	2		
		テレビドラマによる動機付け	・ドラマを見てあこがれるようになった。	1		
	突発的なきっかけ	代表選手に選ばれたことによる将来への期待	・全国の代表選手に選ばれて、選手になれる可能性ができたから。	1		
	内発的動機付け	興味・関心	好きな教科とのかかわり	・化学が好きで料理が好きだったから。	3	
趣味とのかかわり			・雑貨などが好きだったから。			
好きなもの(動物など)とのかかわり			・動物が好きで、動物とかかわれる仕事をしたいと思ったから。			
外発的動機付けによる内発的動機の浮上	学力との兼ね合い	受験時の学力との兼ね合い	・受験のときに学部を選んでいて教育学部が入りやすかった。 ・受験学部を考えているときに先生もいいなと思ったから。	5		
		受験時の学力不足による妥協	・なりたかった職業の学部には学力不足で入れなかったから。 ・センター試験で失敗したから適当に決めた。			
大学	内発的動機付け	葛藤	希望職種への疑問と模索による新たな希望	・よく考えてみたらやっぱりしたいのは食品系の仕事だと気付いた。	1	
		興味・関心	新たな興味の発見	・大学で勉強することでもっと勉強したいと思うようになった。	2	
			自分の興味への再確認	・本当に自分のしたいことが何かを考えて決めた。		
		挫折	ケガによる選手生命の危機	・怪我をした事で選手生命に不安を感じたから。	1	
経験	実習、知識の獲得による希望職種への疑問と職決定放棄	・塾講師をすることでそちらに興味を感じるようになった。 ・教育実習に行ってあまりあわないと思った。 ・大学で勉強していくうちにこの職業は自分には違うと感じたから。	3			

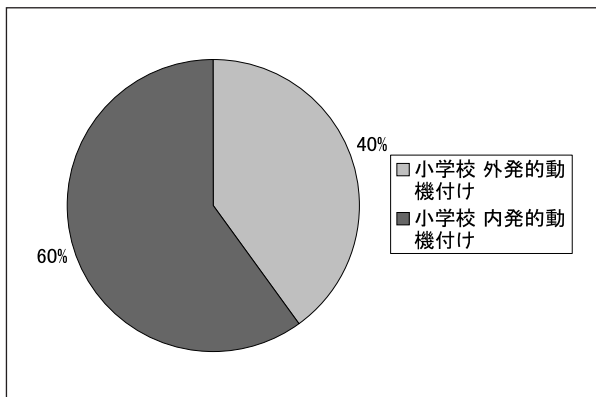


図1 小学校時における職業への希望理由

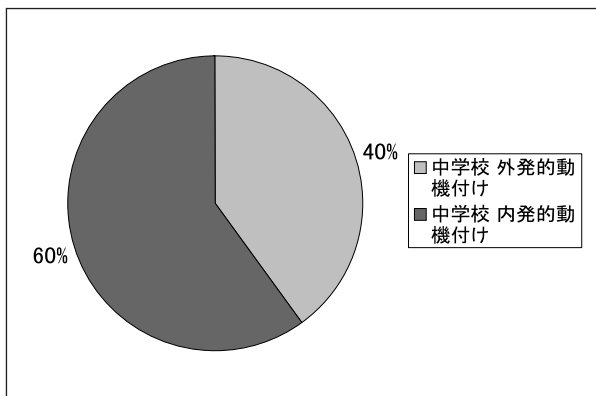


図2 中学校時における職業への希望理由

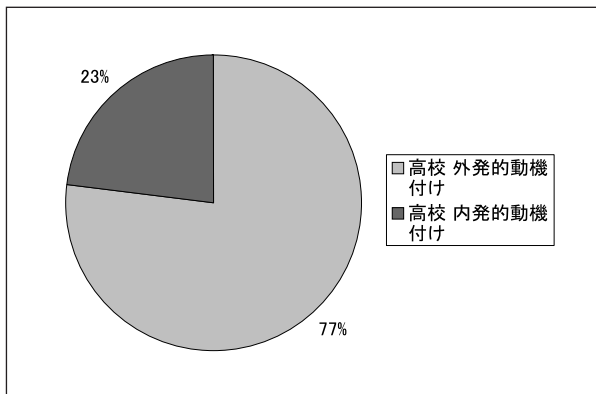


図3 高校時における職業への希望理由

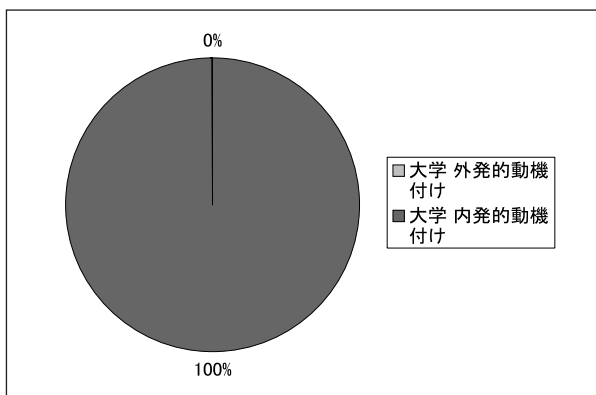


図4 大学時における職業への希望理由

小学校時の職業希望理由において、6割は外発的動機付けを挙げていた。その主な内容は、他者からの勧めや他者への憧れ、また友人への同調であった。小学校時においては、他者、特に親から何か職業を勧められたときに、意思決定をしないまま短絡的にその職業につこうと希望する傾向が見られた。また、残りの4割である内発的動機付けでは、習い事や友人との遊びの中で生まれた興味や、学業成績が良いことによる「頭のいい人が就く職業はこれ」といった固定概念に基づいた希望が見られた。小学校時においては、他者からの働きかけや自己の興味関心に対して、あまり熟慮することなく希望をしていた様子が伺える。これは、小学校時においては「職業」自体をあまり知らないことが安易な希望の原因だと思われる。そのため、小学校時のキャリア発達においては、他者からの刺激や、経験と共に、どのような職業があるのかを知ること自体が大きく影響していると言える。

中学校時においても、外発的動機付けと内発的動機付けの割合は小学校時と変わらなかった。中学校時の特徴的な希望理由は「部活との関連」である。中学校時においては、外発的動機においても内発的動機においても部活が大きく関わっており、部活を通して他者と触れ合うことや、部活を行うことで新しく職業を知る機会を得ていた。中学校時では小学校時と違い、何か就きたい職業があった時にその職業に対して積極的な働きかけをする者も現れている。「ただなんとなく就きたい」と思っているだけでなく、「どのようにすればその職業に就けるのか」を考えだし、暫定的決定を下す場合もある。また、授業の中での職業調べ等の経験から、特定の職業への興味を持ち、希望職種となった場合もあった。

高校時においては、外発的動機付けは約2割に減少し、内発的動機付けが約8割を占めていた。高校時における外発的動機付けで特徴的なものは、理系・文系の分属時に、大学の学部との兼ね合いとして浮上した希望である。これは特に理系志望者で見られる特徴で、理系履修が決まった際に、大学入試や将来の職業について友人と話す中で「理系なら薬剤師」というような偏ったイメージにより希望したものと思われる。また、その時に注目を浴びていた学問への憧れも、高校時には希望理由として挙げられていた。外発的動機付け、内発的動機付け共に、高校時では大学受験や履修分野など学力と職業との兼ね合いが最も重要視されていた。高校時においては、他者からの働きかけといった外発的な動機付けが最終的な決定に結びつくことはあまりみられなかった。反対に、内発的動機付けが大きな役割を担い、受験時の学力不足によって再度希望職種の模索を行うなど、元々は外発的な刺激であっても、それによって内発的な動機が浮上する場合が見られた。高校時のキャリア発達においては、内発的動機付けが大きな意味を持つため、自己

を振り返り、熟考する経験が不可欠となる。

大学時においては、外発的動機付けは見られず、職業希望の理由は全て内発的動機付けに占められていた。これは、突発的なきっかけや、経験などの外的刺激を受けることで自己の意識に変化が生まれ、結果的には内発的動機付けという形で希望に至ったためである。また、大学時においては、半数以上が以前の希望職種をそのまま維持しているという傾向がある。希望職種を維持している者においても、大学時における実習や、アルバイト、ボランティアなどの経験が職業への意識を強化し、意欲を高めている。そのため、大学時の経験がキャリア発達を促す要因となり、意思を強固にし、更に意欲を高めているものといえる。

2. 3. 暫定的決定の意味

上述の4つの型は、さらに、暫定的決定の有無により8つの型、すなわち「暫定的決定経験を有する義務教育段階決定型（I-a）」「暫定的経験を有する高校段階決定（I-b）」「暫定的決定を有する大学段階決定型（I-c）」「暫定的決定を有する未決定型（I-d）」「暫定的決定を有さない義務教育段階決定型（II-a）」「暫定的経験を有さない高校段階決定型（II-b）」「暫定的経験を有さない大学段階決定型（II-c）」「暫定的決定を有さない未決定型（II-d）」の8つの型に分類できた。それら8つの型のキャリア決定プロセスを図示すると図5のようになる。

また、暫定的決定の時期による特徴的傾向を表3に示す。暫定的決定経験者は、その経験が無い者に比べ、職業への積極性、働きかけ、職業を踏まえた活動、肯定的思考、意欲において、意識の高さが顕著であった。自分が希望した職業に就くためのスキルアップとなるアルバイトを選択したり、ボランティア活動などにも能動的に参加するプロセスが認められた。また、自分が希望する職業に対して、強い憧れや期待を持っており、希望する職業そのものを肯定する発言や、自分の職業への適性に自信を持つ発言も顕著であった。事例F6はその一例である。

〈事例F6：女性〉暫定的決定経験を有する高校段階決定型

子どもにとって魅力的な先生になるための訓練をした。

「高校の時はなんか理科の中で自分が興味ある学部があるかどうか調べて、大学入ってからはやっぱり講義とかで実際に子どもとかと接する時とかがあってなんか…ちょっとちゃんと先生のことを

考えたらもっといろんなことをしないとあかん、と思って。自分から子どもと関わることをするようになりました。児童館で一緒にキャンプに行ったり料理したりとか。自分の…子どもと接するには…なんていったらいいかな…子どもにとって魅力的な人であって…私判断が遅いから、判断がすばやく出来るような訓練のようなこともしたかった。」

また暫定的決定経験者は、「働くこと」自体にも強い興味や関心を感じていた。事例M2のように、「働くこと」を「楽しいこと」と、「わくわくすること」と位置づけ、大学を卒業し、職業人になることに対して、若干の不安を感じつつも大きな期待を持っていた。

〈事例M2：男性〉暫定的決定経験を有する大学段階決定型

将来にわくわくしている。

「(将来への希望は)今はすごい感じる。楽しそうっていうか。(仕事をするに関しては)すごくわくわくしている。」

さらに暫定的決定の経験を有さない場合にみられた「できれば就職したくない」「ずっと学生でいたい」といった就職からの回避感情を示すプロセス(事例M3)は、暫定的決定経験者には認められなかった。

〈事例M3：男性〉暫定的決定経験のない義務教育段階以前決定型

現実化する就職への回避

「実際に現実的になってきた頃から(職業に就くことが)嫌になってきた。今は学生でいろいろ時間とかもあるけど、実際自分に年の近い人とかが就職をし始めてその現状を見ると、就職ってこんなに大変なんかな、とか。そういうようなのを考えると…ちょっと…(笑)。考えたりもするけど。もうちょっと遊びたいなって(笑)。」

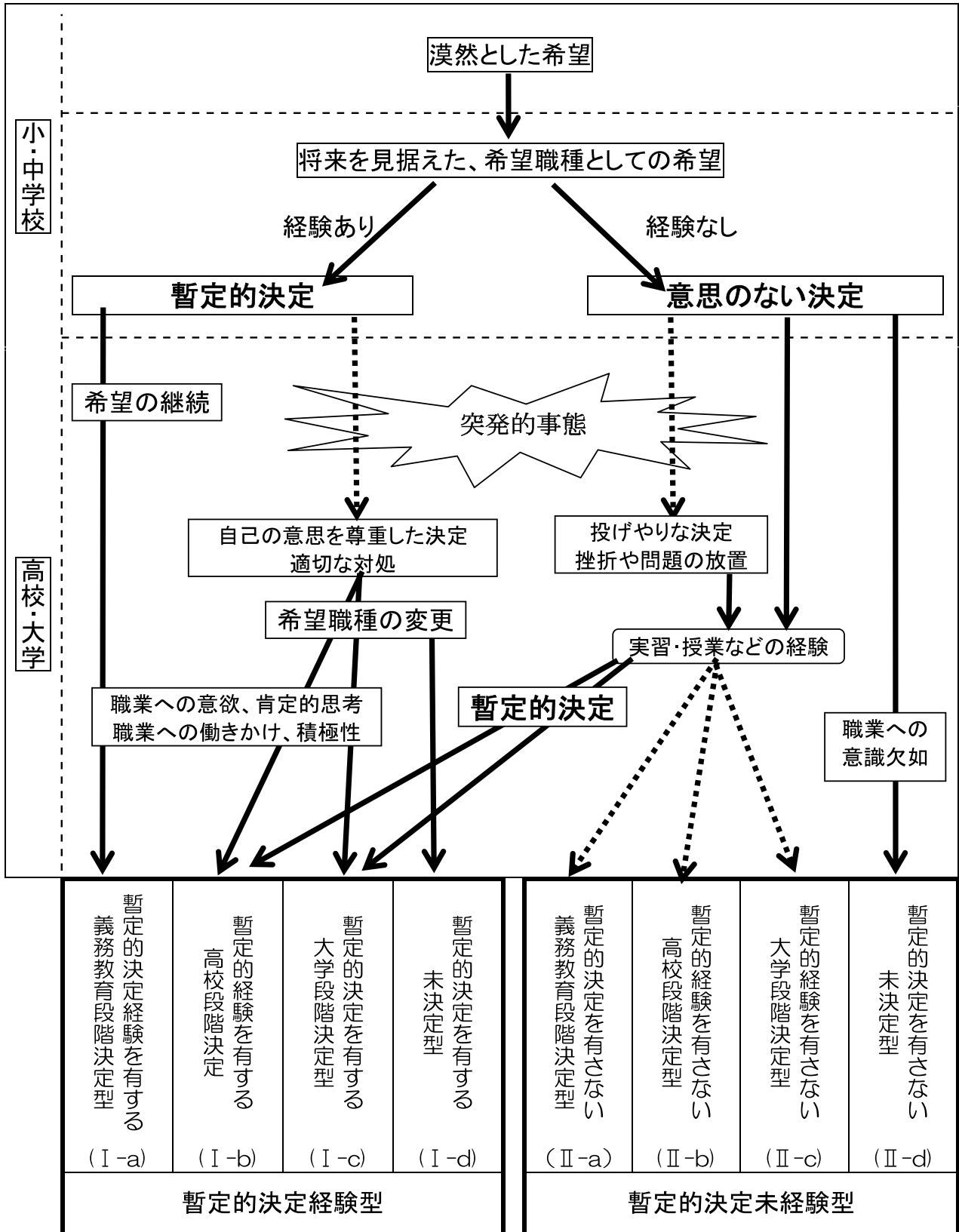


図5 大学生のキャリア決定プロセス

表3 暫定的決定の時期と特徴的傾向

I	暫定的決定有り	決定時期	No.	暫定的決定時期				型	積極性	職業への働きかけ	職業を踏まえた活動	将来への不安	肯定的思考	意欲	就職からの回避	転機経験	挫折経験	葛藤経験
				小学校	中学校	高校	大学											
I			M9	×	○	—	○	暫定的決定経験を有する 義務教育段階決定型(I-a)	○	○	○	△	○	○	×	×	×	○
			F8	×	○	—	—		○	○	○	△	○	○	○	×	×	×
	b (高校)	F6	×	×	○	—	暫定的経験を有する 高校段階決定(I-b)	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	
		F10	×	×	○	—		○	○	○	△	○	○	×	×	×	×	
	c (大学)	M2	×	○	—	○	暫定的決定を有する 大学段階決定型(I-c)	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○	
		M4	×	○	—	○		○	○	○	△	○	○	×	×	×	○	
		M5	×	×	○	○		○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	
		M6	×	○	—	○		○	○	×	△	○	○	×	×	○	○	
		F3	×	○	—	○		○	○	○	×	○	○	×	○	×	×	
		F11	×	×	×	○		×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	
	d (未定)	M7	×	×	○	×	暫定的決定を有する 未決定型(I-d)	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	
		F2	×	×	○	○		×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	
	人数		0	6	11	12	—	10	9	9	4	9	11	2	6	4	6	
	II (無し)	a	M3	×	×	×	×	暫定的決定を有さない 義務教育段階決定型(II-a)	×	○	○	○	○	×	○	×	×	×
b		M1	×	×	×	×	暫定的経験を有さない 高校段階決定型(II-b)	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	
		F1	×	×	×	×		×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	
		F5	×	×	×	×		×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	
		F9	×	×	×	×		×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	
c		M8	×	×	×	×	暫定的経験を有さない 大学段階決定型(II-c)	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	
d		F4	×	×	×	×	暫定的決定を有さない 未決定型(II-d)	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
		F7	×	×	×	×		×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	
人数		0	0	0	0	—	0	5	1	8	2	0	5	0	3	0		

「将来への不安」における△は「今現在はある原因により不安を感じているが、その原因が解決すれば不安は消える」と答えた対象者である。

2. 4. 義務教育段階の暫定的決定の重要性

2. 4. 1. 積極的な進路選択

暫定的決定経験者の中でも特に、義務教育段階暫定的決定者には、職業への積極性、働きかけ、職業を踏まえた活動、肯定的思考、意欲がより顕著に認められた。また、高校、大学受験時においてもその職業に沿うような進路を選択し、着実にその職業に向かって進んできた様子が顕著に現れていた。

具体的には就きたい職業ややってみたい仕事が決まっている者は、「どうすれば、どの学校に行けば、何を勉強すれば、その職業に就くことができるのか」という判

断を行った上で進路選択をしていた。また、特に大学生生活に関しては、「学んでいることが職業に直結している」という思いが、日々の生活にも充実感、満足感をもたらしていた。さらに、そのような充実した生活を送れることに対して、大学受験期における自己の選択の的確さ、適当さを認識し、「あの時の選択は正しかった」という自己満足感を得ていた。

〈事例F3：女性〉暫定的決定を有する大学段階決定型

中学生から就職を見据えた大学選択をしていた。

「英語が得意で、絵本好きやったから絵本の翻訳をしてみようかなって。ほら、それでその時には関西外大行こうかなって思ってたから。(中学校時の職業に対する思いは)結構先のことも見てるしポジティブやわな。その辺くらいから結構具体性を帯びてきてるからさ。」

2. 4. 2. 転機への強さと向上心

義務教育卒業以前に暫定的決定を経験した者の場合、希望職種変更時には、突然希望職種を変更することに若干の不安を感じながらも、実に鮮やかに希望職種を変更していた。そして、希望職種を変更した後も、新たな希望職種に対して積極性は衰えることなく、むしろ以前の希望職種をしのぐほどの積極性を持って、常に目標に向かって邁進している様子が認められた。また、義務教育卒業前の希望職種に疑問を感じた場合や挫折を感じた場合などに、自己と向き合い、疑問や挫折をバネにして、新たな職業へ向きあう活力としていた。

例えば、事例M2のように、希望職種を変更した場合に、以前の希望職種に向けて努力した経験をもとに自己と向き合い、自分はいかにすべきなのかということに熟考していた。「努力をした」「自分は努力できる」「努力の仕方を知っている」という自信は、その後の職業決定を積極的かつ希望に満ちたものにしていった。そのため、希望職種の変更により、大学で学んだ知識が職業に直結しなくなった者も、大学生活に対してマイナスイメージは持っておらず、むしろ「本当にやりたいことが見つかったのは大学に入ったからだ」という様に自己の大学選択を肯定的に捉えていた。

〈事例M2：男性〉暫定的決定を有する大学段階決定型

夢に対する疑問に立ち向かうことで本当にやりたいことが分かった。

「チューターとか学びんぐサポーターとか……。実際に現場を見て、なんか自分は教師になりたいって…思い込んでたところがあって、「これじゃ違うな」って。(大学に入ったことは)必要とは思う。やっぱり自分と向き合ってたというか、その…教師の夢に疑問をもって立ち向かっていったから本当にやりたいことがわかったというか…。そういうことがすごくよかったと思う。」

2. 5. 他者の影響

個人の進路決定、または希望職種の決定において、他者が大きく関与していた。他者との関係による影響は、「職業人への憧れ」、「他者からの働きかけ」、「他者への同調」が認められた。

①職業人への憧れ

職業人への憧れとは、すでにその職業について働いている大人に対する憧れにより、その後の職決定に影響を及ぼす場合のことである。

これは、教職希望者に特に多く見受けられた。一番身近である職業人である教師に接することによって、教師に対する憧れ、教職に対する憧れを感じ、職業イメージを構築していた。また、テレビドラマの中の登場人物に対して憧れを持つ場合も多かった。

〈事例F2：女性〉暫定的決定を有する未決定型

教師が一番身近な働く人だった。

「小学校の先生になりたいって思ったのは小学校の先生を見てるから。一番身近な働いてる人やん。中学校のときに(夢が)中学校の先になったっていうのも身近だから(笑)。小学校のときと同じ理由。小学校の3年生のときと4年生のときがいい先生やってん。いいなーって。憧れみたいな。」

〈事例F9：女性〉暫定的経験を有さない高校段階決定型

受験期に親身になってくれた先生の仕事に憧れを感じた。

「高3の担任の先生が…数学の先生で、吹奏楽の顧問で、すごい仲良しやって、いろいろ話もしてくれて。

…なんか…入試の時とかに全然何も受け持ってもらってない先生とかも教えてくれたり相談にのってくれたりしたからなんか…『ええんちゃうん?この仕事』って。」

〈事例F6：女性〉暫定的経験を有する高校段階決定型

テレビドラマの教師にあこがれた。

「中学校のときはたぶんドラマで小学校の先生のドラマを見て、それで小学校の先生になりたいと思いました。「みにくいアヒルの子」…。あれは中2か中3くらいやと思います。『これはええわ』って。そう思ったと思います。」

②他者からの働きかけ

他者からの働きかけには、他者からある特定の職業に就くように勧められたり、他者のアドバイスによって進路を決定したり、また、他者によってある特定の職業に就くことを希望されることなどがみられた。他者とは、学校の教師、親、塾の講師、友達など様々である。

他者によって特定の職業に就くように勧められる際には、「あなたにはこのような職業が向いている」といった、自己の適性を踏まえた上でのアドバイスが、進路指導時などに学校の教師によって行われることが多かった。自己の適性を第三者から「保障」されることによって得られた自信が、希望職種に変化を与えたものと思われる。また、他者からの働きかけが、希望職種が明確でないときに行われた場合、その影響はより大きくなることが予想される。

〈事例F2：女性〉暫定的決定を有する未決定型

教師の適正を踏まえたアドバイスによる方向付け

「中3の時の担任の先生が卒業するときに『一緒に働きたい』とか言ってる。『先生になってほしい』って。うちに。でも、…なんか…『記者とかも向いてるんじゃない?』って。雑誌の編集とか。それも…『向いてる』って言われたら調子乗りやから(笑)。そっちにこう…気持ちが行って…。で、社会学部…に興味を持ち出したと思う。」

〈事例F8：女性〉暫定的決定経験を有する義務教育段階決定型

親の希望により一時的に揺れた。

「高校の時は一瞬なんか…建築家っていうか…そういうのをやりたいなって…いうのは親の影響やけど(笑)。大学を決める時やから…1年の終わりとか2年とか。それくらいから。…建築家になれとは言われたことないけど。大学選ぶ時に「工学部は？」みたいな。そういうのもあってちょっといいかなって思ったけど。」

③他者への同調

他者への同調とは、他者が希望した職業に同調をし、全く同じ職業を志す場合である。この行動は特に友達関係において現れていた。その希望の中には自己の意思は含まれておらず、その希望を最終決定まで持ち越す場合はごく稀であった。また、希望理由を尋ねた際に、対象者たちはみな一様に恥ずかしそうな表情を浮かべ、自己

の意思によらない決定に対して疑問と恥じらいを感じているようであった。

〈事例M4：男性〉暫定的決定を有する大学段階決定型

友達の希望に便乗した。

「宇宙飛行士は友達がなんか…サイエンスか何かの雑誌を持ってて宇宙の話をしよっちゅうしてるやつで。…じゃあおれも宇宙飛行士になってまえ! って。実際自分はサイエンスとかを読んだりとかもしてへんかったよ。(笑)。」

〈事例F11：女性〉暫定的決定を有する大学段階決定型

安易に友達の夢の真似をした。

「友達がな、ずっと保育士になりたいって言ってたからその真似してん(笑)。中学校の時の保育士っていうのは友達の影響だけ。友達が…その子はもうずーっと小学校のときから保育園の先生になりたいって言ってて、それを聞いて、安易に…。本当に安易に「あー、私もちっちゃい子好きやしー」って。「あ、じゃあなろうかな」って。高校の時も、自分の意思は特になかったと思う。今思えば。

大学受験で進路を決めるときに、何になるかってなって悩んで…。でもやっぱり(保育士に決めたのは)友達が言ったからやわ。」

〈事例F9：女性〉暫定的経験を有さない高校段階決定型

みんなの流れに乗ってみた。

「文系とか理系とか分かれるやん? その時に理系の子達としゃべってたらみんな薬剤師って言ってたから『じゃあ私も薬剤師』って。なんかみんな理系の子は結構薬学に行きたい子が多かったから、一緒に流れに乗ってみた(笑)。」

このような他者の影響により、最終的な希望職種を決定した者はほとんどいない。しかしながら、進路決定や希望職種決定のきっかけなどには他者が大きくかかわっており、個々人のキャリア発達において他者との関係は重要な意味を持つことが明らかとなった。また、他者からの働きかけによって、新たな希望職種が浮上した場合、

以前の希望職種との間で葛藤することとなり、その経験が自己と向き合うきっかけとなる。

キャリア決定時における他者からのアドバイスや他者への同調による決定は、その時点では納得し、その通りだと感じたとしても、事例F11のように、時間が経ってから後悔する場合もみとめられた。他者の意見を取り入れることは必要であるが、他者の意見に容易に流されず、他者の意見や見解を踏まえた上で、最終的な判断は自らが下すことが重要である。

〈事例F11：女性〉暫定的決定を有する大学段階決定型

他者からのアドバイスによって進路を決定したことへの後悔

「(短大ではなく四大に行くとしたのは) …何かな、安易なんやけど、塾の先生に「短大やったら遊ばれへんで」って言われて…。短大行ってた友達なんかはもう…。短大って技術からやるんやんか? 四年制って技術よりどっちかって言うと議論やから。技術…。ピアノとか。だからそういうのをみてたらすごくうらやましくて。短大の子らはもうバンバン実習も行くし。それみてたら「なんで私は四年制にきてしまったんだろう」って思うことが何回かあって。大学に入る時点で(保育士の免許が) 取れないことは知ってた。けど、ここを選んだのは「四大じゃないと遊べへんよ」って言われたから。で、四大行くなら国立行きっていわれたから。大学に入った四年間はそれなりに意味はあったと思うけど、今となっては後悔することも多かったと思う。」

3. まとめ

本研究の結果、暫定的決定を行った経験の有無により、その後のプロセスは大きく異なることが明らかになっ

た。暫定的決定を行っている者は、職業に対する肯定感や積極性が高かった。さらに、職業に対する働きかけも積極的に行う傾向が認められた。また、暫定的決定を行った経験は、転機や挫折に怯まず進んでゆく強さや、自己を見つめ、より良くしようとする意識を育てていた。一方、暫定的決定を行った経験のない者は、暫定的決定を行った経験のある者に比べて、職業肯定感や積極性に欠けていた。また「働くこと」自体を回避したがる傾向が見られた。

暫定的決定を行った経験を有する者の中でも、特に義務教育卒業以前の比較的早期に暫定的決定を行った経験のある者は、「職業への積極性」「職業への憧れや肯定感」「職業への働きかけ」などが、顕著に高かった。暫定的決定を義務教育卒業以前に行うことは、その後のキャリア決定をより円滑に、また意思を持って決めるための手助けとなっていた。暫定的決定を行った経験はその後の進路選択において大きな意義を持つとともに、特に進路選択前、つまり義務教育卒業以前に暫定的決定を行うことは大きな意味を持つことが示された。

これらの結果は、キャリア発達を促進するためには、幼い頃から意思表示や意思決定を行う機会を増やし、自分自身で決定することの意義を繰り返し教授することが必要だと示唆するものである。

現在、キャリア教育が学校現場にも多く導入・実施され、成果を上げている。今後さらに効果的なキャリア教育・キャリアガイダンスを行うためには、教育現場、特に小・中学校において、将来の希望職業について暫定的決定を支援する教育を行なうことが必要であろう。さらに、他者の影響の重要性をふまえた、ピア・サポート等の能動的な活動を行うことによって、児童・生徒の生涯におけるキャリア発達の基盤を構築する手助けをしていくことも求められる。

引用文献

- 1) 河崎智恵「家庭科におけるキャリア教育の開発に関する研究」(2004) 風間書房
- 2) 平山満義「質的研究法による授業研究」(1997) 北大路書房
- 3) 箕浦康子「フィールドワークの技法と実際」(2002) ミネルヴァ書房